

# 岩猿敏生司書官誕生と大学図書館経営の 学問的遍歴のはじまり

——九州大学附属図書館司書官時代——

山 中 康 行

本稿の目的は、岩猿敏生が最初に司書官として勤務した九州大学附属図書館の時期に焦点をあて、彼の足跡を研究することを課題とする。最初の論文「図書館学方法論試論」を手がかりに、大学図書館経営と図書館学の学問的イメージについて考察を加える。関連著作の文献研究を通じ、帝大卒業後図書館司書官に就いた岩猿が、行政官の最高責任者として図書館経営（運営）の根本理念の「学としての図書館学を樹立しようとする試み」が国立大学附属図書館の幹部職員としてどのように、実務、研究の積み重ねを通じて、時宜に応じて発展・変化させたのか。当時の社会的文脈に即して検討することによって、その端緒を明確にすることができる。ほぼ1世紀の長命を享受し、戦後日本の図書館界を牽引してきた岩猿敏生の大学図書館経営と図書館（情報）学の全体像に近づく第一歩を明らかにする。

（研究テーマ：「岩猿敏生の業績に見られるわが国大学図書館経営思想の考察」で岩猿の業績を、第1期九州大学附属図書館司書官時代 第2期京都大学附属図書館事務部長時代 第3期関西大学文芸部教授時代 第4期『日本図書館史概説』執筆以降の4期に分け研究をすすめている。本稿は、その第1期の論考で、研究テーマの導入部分になる。）

---

キーワード：岩猿敏生，大学図書館経営，図書館学論，Library economy，Library science

## はじめに

戦後におけるアメリカ図書館学の影響：図書館法に定められた、司書、司書補の資格付与のための講習会の講師養成（「図書館専門職員養成講習指導者講習会」の目的：当時図書館界の第一線にあった人たちを対象に、図書館法の正確な考え方を修得させる。）、と講習にもちいる講義要綱作成のため、1951年に3回指導者講習が開催された。教育指導者講習会ではアメリカの第一線の図書館人が講師として直接指導した。司書、司書補の資格付与のための講習会は1951年から、全国の主として国立大学を会場に開催された。講習会では、教育指導者講習会（IFEL=Institute for Educational Leadership 図書館学科の教員資格認定の講習）を受講した（図書館法に示された新しい図書館理念を修得した、当時図書館界の第一線の）人たちが講師となって、全国的にアメリカ図書館学の成果が伝達された。講義内容は従来の図書館に対する資料中心のイメージしか持ち合わせていなかった当時の図書館員にとって、図書館の存在意義は利用者サービスにあるという、従来の図書館観を180度転換した衝撃的でしたらあったとともに、図書館の明るい未来をも予想させるものであった<sup>1)</sup>。岩猿は第1回の指導者講習を受講、1951年から九州大学で開催された図書館法に基づく司書講習会の手伝いを通して図書館業務の全面的な輪郭を理解する機会を得た<sup>2)</sup>。

「アメリカ図書館学の成果に図書館職員が司書講習を通じて間接的に触れたことは、彼等の図書館の相違、落差はどこから生じ、その落差を克服すればよいかという反省が必然的に湧き起こらざるをえなかった。解決はたんなる技術論だけでは不可能である。（中略）どうしても、図書館はどうあるべきか、図書館とはなんであるかといった根本的な宿命にまで立ち返らざるを得なくなったのである<sup>3)</sup>。」

「このころ、九州の図書館界で、図書館の負うべき文化的機能を学問的に

---

1) 高山正也、岩猿敏生、石塚栄二『図書館学概論』講座 図書館の理論と実際1 雄山閣、1992.4, p. 189

2) 遺稿935

3) 前掲1, p. 190

追求していくためには、学会を組織すべきだということになり、1953年秋、当時の福岡県立図書館長菊池租氏を中心として、西日本図書館学会が結成された。岩猿は学会事務局を担当するとともに、同時に機関誌「図書館学」の編集を担当した。機関誌は翌年の1954年6月に創刊号を、55年6月には第2号を出した。その第2号に掲載された「図書館学方法論試論」が岩猿の館界に入ってから5年目に投稿され図書館関係の最初の論文となった<sup>4)</sup>。

岩猿が司書官になった当時の図書館界のリーダー達は、戦前に図書館界に入り図書館のハウ・ツー中心のライブラリ・エコノミー、整理面での実務に精通した人々<sup>5)</sup>であって岩猿が模範・参考にできる人物はいなかった。岩猿は、図書館法のもとでの新しい図書理念・管理に必要に迫られ、図書館学の意義そのものを根本から哲学的に追求していかなければならなかった。

図表1 「図書館学方法論試論」執筆前後の社会情勢

1943年	『日本目録規則』
1945年8月15日 敗戦	
連合軍の五大改革指令	
① 男女平等普通選挙制度による婦人の解放 ② 労働組合の結成を奨励	
③ 学校教育の自由主義化 ④ 秘密の検察やその濫用や諸制度の廃止	
⑤ 独占的産業支配の改善と経済機構の民主化	
1946年 日本国憲法公布（1947年施行）	
1947年 冷戦戦争（資本主義陣営と社会主義陣営）	
二・一ゼネスト中止 教育基本法・学校教育法公布 六三制実施	
1950年 朝鮮戦争（～53）	『日本十進分類法』
警察予備隊新設 レッドパージ	岩猿九州帝国大学附属図書館司書官
1951年 サンフランシスコ講和条約	
日米安全保障条約調印	
1952年 破防法成立 メーデー事件	『図書館ハンドブック』
1953年 警察予備隊が保安隊となる	『日本目録規則』
1954年 防衛庁設置法・自衛隊法公布	「図書館の自由に関する宣言」
1955年 保安隊が自衛隊となる	岩猿「図書館学方法論試論」
1956年 日ソ共同宣言 国連に加入	『基本件名標目表』

4) 遺稿 956. 957

5) 「永末十四生君を悼む」『図書館文化史研究会』No. 13, 1996. 12, p. 16.

## I 第1期 岩猿敏生・図書館学関係論文

### 1. 「図書館学方法論試論」<sup>6)</sup>

「一つの学問が学として構成される学問構成の原理は方法論として追求されなければならない」というバトラーの言を引用して、「図書館学方法論についていささか考えてみようとするのはこのためである。」と執筆の動機を述べている。そして「図書館学の学としての可能性の問題」、「図書館はいかにあるべきか」に対する岩猿の見解を示している。理路整然とした哲学的な論述で難解な論文である。現場の経験を経ずに、図書館の管理職（司書官）に就いた岩猿の、行政官の最高責任者として図書館の理念、ポリシーの認識は業務を執行する上で不可欠であり、緊急の課題であったことがうかがえる。図書館経営（運営）の根本理念の図書館学についての考え、拠り所を開陳した論文である。岩猿が京都帝国大学で学んだマックスウェーバー哲学の影響が論理構成に強く見られる。

先行研究の文献を6点<sup>7)</sup>示し「先学の後に図書館学方法論試論を書いてみた」<sup>8)</sup>とある。しかし、これらの論文等を直接参考にした箇所は「図書館学方法論試論」に見いだされない。とらわれることなく独自の理論を展開している。「試論」と題しており、岩猿独自の論考「学としての図書館学を樹立しようとする試み」が読み取れる。その論法は、「図書館学の学としての建設が要請された理由の一つ」→「図書館学の学としての可能性の問題を問うということは図書館活動の実践にとってどういう意味を持ちうるか」→「凡ゆる科学が歴史的には先ず実践的観点から出発したように、図書館活動の実践をより合理的な観点の上に基礎づけようとするのである。」→「これまでの図書館関係の多くの論考は実践的技術問題に大体終始してきた。」→

6) 「図書館学方法論試論」『図書館学』No. 2, 1955. 6, p. 1-10.

7) ①藤林忠「図書館学の基礎問題」1951 ②黒田正典「図書館学原理に関する一考察」③菊池租「図書館学のAkademie性について」④有山崧「図書館学成立の一つの可能性」⑤神本光吉「図書館理論と図書館実務」⑥高橋正明：第3回日本図書館学会で発表「図書館学の性格」等

8) 「図書館学論の進展」で、藤林忠「図書館学の基礎問題」が最も早い論文と紹介している。(p. 7)

「技術は所与の目的に対する手段にすぎない。」→「複数の手段のなかから目的にたいして適合性をもちうるかの判断は試行錯誤。合理的な技術批判を可能にするのが科学でなければならない」→「図書館学の学としての建設を要請されるのは、これまでの技術問題に対して、技術批判を与えようとするのがその一つの理由」→（しかし）「技術は所与の目的に対する手段に過ぎないから、技術論からは目的自体の批判は不可能である。」(p. 2) このように論理的に論述している。

図書館学が図書館活動の実践的意味について問いかけ、「図書館学の樹立は、これまでのような実践的技術論では不可能である」つまり、1.「図書館を一つの文化的制度、図書館活動を一つの文化現象としてとらえ、社会機能が歴史的に移り変わっている。」2.「図書館学の学としての建設を要請されるのは1) 図書館の目的と2)「図書館の根底にある理念を批判的に評価しようとする事である」と結論している。「学としての図書館学の樹立は、図書館が実際的な問題解決に役立ったかを明確にすることができる」として、図書館学の樹立の意義を述べている。追記に、「本論は学としての図書館学を樹立しようとする一つの試みにほかならない。」そのことは、図書館学が実際的な問題解決に役立つかを明確にすることができる」(p. 10)と説いている。つづけて、岩猿が意図している図書館学の概念について、予想される反論の項目として、「視聴覚資料の限界の問題、教育的機能の問題、図書館と社会との関係等の問題にふれておければ、私（岩猿）の考えがもっとはっきりするだろうし、図書館学が実際的な問題解決にいかに役立つかもはっきりするだろうと思っていたが、紙葉の関係で論究できなかった」(p. 10)と記している。後年「図書館史〈特集：戦後日本における図書館学の発展〉<sup>9)</sup>で執筆動機を次のように述べている。

「戦後の図書館史研究をかえりみて言えることは、第1に図書館史的事

9)「図書館史〈特集：戦後日本における図書館学の発展〉」『図書館界』Vol. 11, No. 2, 1959. 8, p. 33-37.

実の発掘から一歩進んで、「図書館はいかにあるべきか」という現実的な関心から図書館史研究が進められてきたことである。本格的な図書館史研究があらわれはじめた1952（昭和27）年頃から、いわゆる図書館学論が大きく問題になりはじめてきていることを、われわれは同時に注意しなければならない。これも「図書館はいかにあるべきか」という、図書館史の場合と同じ現実的な関心からおし進められてきたもので、同じ関心が一方では歴史的構成へと向かわせ、又一方では図書館学の理論的構成へと向かわせたのである。それは結局従来の図書館像の上に安住しておくことを許さなくなった現実の図書館界の進展、それに伴う図書館像の混乱と矛盾。そうした現実からの強い要請を、自覚的に研究者たちが問題としてとりあげはじめたのである。大げさに言えば、日本においては昭和27年頃からはじめて図書館現象が学問の対象として、本格的にとりあげはじめられたと言ってもいいかも知れない。戦後の図書館史研究を特徴づけるのは、このような一般的な図書館学界の流れのなかで、本格的な科学として研究が進められはじめたということである。50年代初めに、アメリカ図書館学に直面したことによって、それまでの図書館研究が、根底から問われた、50年代の図書館学論には、自分たちの立つべき基盤を模索し、基盤の確立なくしては、今後の図書館学研究の方向づけすら困難だという深刻さがあった。』<sup>10)</sup>

「敗戦により天皇制絶対主義体制の崩壊、民主主義社会体制の基礎が日本国憲法によって置かれた。図書館は思想、信条の自由、表現の自由が保障される民主主義社会の中で始めて可能となる。わが国においても、敗戦後ようやく図書館発展の社会基盤が得られた。戦前の図書館学研究は図書館に関する研究を包括する一般的な用語 Library economy であった。戦後はひとつの学問領域としての図書館学の確立を目差す Library science へ

10) 「図書館学論とライブラリアンシップ」『論集・図書館学研究の歩み第2集：図書館学の研究手法』日本図書館学会研究委員会，日外アソシエーツ，1982. 9, p. 15

の展開を遂げようと努力がなされた。契機となったのは、図書館法であり、司書、司書補の資格取得・司書講習・大学での科目履修。講義要綱がアメリカ流の奉仕の重視であった。戦後、日本の図書館界はアメリカ図書館学一辺倒。講習会を通じて全国に拡大した。当初の司書講習は教育の現職者の再教育であり、新しい図書館理念が全国に普及。図書館学研究の促進に寄与した。大学で教えられる科目になったことは、図書館学が学問領域として大学教育としての学の認知がえられることを意味する。1951年日米安全保障条約が締結され、日本は冷戦構造の一部に組み込まれた。その結果政治思想上の対立が激化、破壊活動防止法の公布。社会動揺の影響から図書館界にも思想的対立への対処、図書館は中立を守るべきか、中立とはなにか、図書館の社会的あり方に対する反省を図書館界は迫られた。そこから、図書館のあり方を根本的に問おうとする動きが生まれて来た。」<sup>11)</sup>

1953年11月に、岩猿が深く関わった、西日本図書館学会が創設された。機関誌『図書館学』が1954.6に創刊された。この『図書館学』という誌名について、「図書館学を一つの学問領域として確立したいという期待を含めての命名。しかし、そこにはかなりの力みや気負いがあった。それは当時一般に図書館学という学問があるのか、図書館とはなんなる施設ではないか、それに学という言葉を点けただけで一つのサイエンスが成立しうるかという当初から予想された疑問であった。」<sup>12)</sup>と懐古されている。このような図書館界の動きのなかで、岩猿の図書館学方法論試論が投稿された。

後年、岩猿は本稿の執筆意図について「図書館学方法論試論という文章は書きましたが、これは図書館という文化的事象を学問の対象として研究する場合の一般的な社会科学的思考の枠組を考えてみただけで、その内容にふれ

11) 「日本における図書館学の歩み」—平成5年度橋本記念講演— *Library and Information Science*. No. 31, 1994, p. 133-142.

12) 「文庫、書籍館、図書館そして〈壁のない図書館〉へ」『図書館学』No. 100, 2012. 3, p. 1-9. (P. 2)

るものではありませんでした。そこまでは、当時の私にはまだ踏み込む力はありませんでした」<sup>13)</sup>、「図書館という文化的事象を学問の対象として研究する場合の一般的な社会科学的思考の枠組を考えた」<sup>14)</sup>と述べている。九州大学附属図書館司書官在官時に学術雑誌の投稿論文はこの一遍だけであるが、新聞への投稿が多くあり、この時期に図書館学（書誌学）についても意欲的に情報収集をしていたことを推し量ることができる<sup>15)</sup>。

翌年（1956）4月岩猿は、九州大学附属図書館（司書官）から、京都大学附属図書館事務長に転任している。京都大学附属図書館に異動した1956年には「図書館学方法論試論」の続編ともいえるべき論文として、「図書館学論の進展」<sup>16)</sup>1958年に「図書館学における体系と方法」<sup>17)</sup>及び「図書館学における比較法について」<sup>18)</sup>「藤川正信：図書館学における技術性的問題（書評）」<sup>19)</sup>を次々と発表して試論の不備を補い、思考の発展を論述している。

## 2. 「図書館学論の進展」<sup>20)</sup>

岩猿は「図書館学方法論試論」で言い尽くせなかったことをこの論文で述べている。戦後の図書館学論の一つの大きな特色は、「図書館学の学としての可能性」をその原理から問わんとする点にあったと書きはじめ、日本の戦後の図書館学論の進展について、①戦後の図書館界にとってもっとも顕著な

13) 遺稿 958

14) 遺稿 958

15) 九大新聞 昭和26年4月「最近の洋書文庫本について」。毎日新聞 昭和26年9月「書物の革命」。昭和29年10月「本の話」①書物について②著者について③形について④本の美について⑤装丁について⑥誤植について⑦印刷について⑧本の敵について⑨書狂について など。

16) 「図書館学論の進展」『図書館雑誌』Vol. 50, No. 1, 1956. 1, p. 7-9.

17) 「図書館学における体系と方法」『日本図書館学会会報』Vol. 4, No. 2, 1957. 9, p. 1-8.

18) 「図書館学における比較法について」『図書館学の学と歴史』（京都図書館協会十周年記念論集）1958. 7, p. 1-6.

19) 「藤川正信：図書館学における技術性的問題—『図書館学会年報』Vol. 5, No. 1 所載」（書評）『図書館界』Vol. 10, No. 4, 1958. 10, p. 124-126.

20) 『図書館雑誌』Vol. 50, No. 1, 1956, p. 7-9.



現象の一つは、いわゆる図書館学論の進展である。②戦後の図書館学論の一つの大きな特徴は「図書館学の学としての可能性」をその原理から問わんとする点にあった。とまとめ、図書館学の学としての成立の可能性を本格的に問おうとした論文が、何れも昭和 26（1951）年頃から次々と発表されてきているのは面白い。と述べその要因として、戦後のアメリカ図書館学の影響が「我が国の図書館界はまさに 180 度の転回を余儀なくされるほどの影響を受けた（p.7）。それまでの整理中心から奉仕活動に重点がうつされてきた。これは近代図書館のあり方として当然なことといえるであろう」<sup>21)</sup>としている。さらに論をすすめる図書館学論の進展の要因の内容を詳細に記述している。

1) 戦後日本の図書館運動は、G.H.Q.やC.I.E.図書館担当官の熱心な指導と助力により再出発した。1948（昭和 23）年から 1951（昭和 26）年にかけての日本の図書館界の流れは、IFEL図書館学講習（昭和 23（1948）年～昭和 26（1951）年）と指導者講習（昭和 26（1951）年東京大学と慶応大学）で頂点に達した。これらの講習会で日本の図書館界の現役の第一線級にある人たちが、アメリカのテキスト（アメリカ図書学の輝かしい成果をテキストとし、あるいは直接に米人講師の指導のもとに、講義要項の作成。）図書館法の規程に従って開講されることになった司書及び司書補講習会の影響である。1950（昭和 25）年 4 月 30 日図書館法制定。1950（昭和 25）年 9 月 6 日図書館法施行規則（文部省令） 図書館講習に必要な科目について、講師が講義上留意すべき点を示している。図書館員職員として必要な科目として、とくに図書館奉仕（視聴覚資料、レファレンス・ワーク等）戦前には殆ど考慮が払われなかった図書館活動の分野がクローズアップされた。

2) 新しい図書館活動の領域の開拓→これまでの図書館活動に対する根本的な反省→本格的な図書館学への動きは、先ずこの人たちから始まっ

21) 「ライブラリアンシップについて」『図書館雑誌』Vol. 50, No. 4, 1956. 4, p. 26

た。

### 3) 大学における図書館学講座や講義の開設

1949(昭和24)1950(昭和25)年以降相次いで大学で講義が始められるようになったことが、図書館学論の進展に拍車をかけることになったことは否めないだろう。近代図書館は近代社会なくしては存在しない。

4) 1951(昭和26)年9月サンフランシスコ平和条約締結の頃を境として、戦後急速に推し進められてきた日本の民主化が一つの壁にぶちあたった。この頃から政府はますます反動化し、戦後高唱された文化国家の理想は影の薄いものになって行った。→こうした政治的社会的情勢は図書館活動の面においても深刻な影響を与えざるを得なかった。近代図書館は先進国の例が示す通り、近代社会にその成立の基盤を持つものである。戦後の民主化のなみに乗り、日本の図書館界も急速に近代図書館へと脱皮して行ったが、この脱皮には、図書館人の側はかなり甘さがあったのではない。極限すれば、時流に乗ったというか、あなたまかせのわが世の春といった観がないでもなかった。戦後アメリカは日本の図書館の育成にかなり力こぶを入れ、終戦の年いち早く C.I.E.図書館が開設され、また翌21年には米国教育使節団の図書館に関する勧告があり、その後G.H.Q.やC.I.E.図書館担当官の熱心な指導と助力により、日本の図書館運動ははなばなしい再出発のスタートを切った。ところが、この図書館運動と、その存在基盤である社会との間にずれが生じてきたのである。「逆コース」という言葉がささやかればはじめ、言論思想の自由にすら影が漂いはじめたのである。これまで順風に帆をはらんだ観のあった図書館人の間に、図書館の中立性の問題が深刻な問題として、大きく取上げられなければならなくなった図書館活動と社会の間のずれが自覚されてくるとき、そこから必然的に図書館のイデー(理念)についての反省が生まれてこなくてはならない。そしてこのことは図書館活動の諸領域を底で統一する原理的なものの考察へと導くであろう。原理的なものを確立する事によって、今後の図書館学は単なる並列的、平面的な記述を脱して、立体的な深みをもったものに

なってくるだろう。そしてその成果は社会の近代化のための図書館人の戦いにとっても、力強い支えとなってくれるであろう。

岩猿が「図書館学論の進展」で主張したかったことは、図書館法で、図書中心（人文科学）の図書館が、利用者サービス（社会科学）へと転換したことであり、図書館学の対象者は利用者で、近代社会は人が主体の社会である。近代図書館は近代社会にその存在基盤を置いている。近代図書館は近代社会なくしては存在しないが、またそれ故に近代的な図書館活動が近代社会建設のためのおおきな動力となることができると述べ、近代図書館のはたす重要な役割を指摘している。敗戦後民主国家になった日本の近代社会が、政治的社会的情勢（1951年の政府の反動化）の変化に、戦後の新しい図書館学を身につけた図書館人がよって立つ基盤を主体的に取り組む必要性を説き、図書館活動と社会の間を自覚し必然的に生まれてくる図書館のイデー（理念）の反省から、図書館活動を支えている原理的なものへの考察を導くと述べている。50年代初めに、アメリカ図書館学に直面したことによって、それまでの図書館研究が、根底から問われた50年代の図書館学論には、自分たちの立つべき基盤を模索し、基盤の確立なくしては、今後の図書館学研究の方向づけすら困難だという深刻さがあった<sup>22)</sup>。

### 3. 「図書館学における体系と方法」<sup>23)</sup>

図書館学の研究法としての「図書館学方法論試論」で述べた図書館学方法論について、図書館学の理論構成を社会科学的思考の枠組み（歴史的方法）からその内容について言及している。

学における体系と方法について、「学問における体系の優越性を説いたのはヘーゲルであった」「知識は学問としてのみ即ち体系としてのみ現実的で

22) 『論集・図書館学研究の歩み第2集：図書館学の研究方法』（p. 15）

23) 「図書館学における体系と方法」『日本図書館学会会報』Vol. 4, No. 2, 1957. 9, p. 1-8.)

ある」「体系なくして哲学することは少しも学問的であり得ない」「体系とは組織の概念でなければならない。学における体系とは組織だてるという一つの方法概念として考えることができるであろう」(p. 1) とヘーゲル哲学による学における体系を定義づけている。学門における方法には、1) 「学問研究の方法」(種々の図書館現象を統計的方法で取り扱う) 歴史的方法で対象にせまる方法概念と 2) 学問内容がいかなる観点から選択されたかという「学問構成の原理」の二つの方法概念を区別しなければならない。とし、図書館学論は、第二の方法概念にかかわるものである」(p. 1) と定義をしている。

図書館学論(図書館学という学問の構成原理の基礎に就いての一般的考察)について、小野則秋、大佐三四五、神本光吉、藤林忠の四人の説を紹介し論述している。

①小野則秋の図書館学の体系「図書館学序説—図書館学ノ可能性ト限界ニ就イテ」<sup>24)</sup>の図書館学の体系を示す。

図書館学ヲ基礎ヅケルモノハソノ体系デアル(4部門)

- 1) 図書館の本質ヲ論定スル原理論：原理論：図書館史，図書館教育
- 2) 機能ヲ統率スル方法論：方法論：図書整理法，図書利用法
- 3) 形式的統制トシテノ行政論：行政論：図書館法規，図書館管理法，  
図書館運動
- 4) 補助科学論：社会学，教育学，論理学，書誌学，其他

②大佐三四五の図書館学の体系<sup>25)</sup>

図書館学の構成体系(5部門)

- 1) 理論 2) 史論 3) 実務論 4) 文献学 5) 補助科学

小野・大佐両者の体系についての岩猿の批判は、「その当時の図書館員の知っておくべき知識の項目の羅列といったものであって、学問的であるより

24) 小野則秋「図書館学序説—図書館学ノ可能性ト限界ニ就イテ」図書館研究9巻3号 1936. P. 347-358)

25) 大佐三四五の図書館学の体系『図書館学の展開』丸善，1954. 6. 329 p.

は教育的である。」と述べ、「体系は一つの方法によって貫かれなければならない」小野の4つの部門、大佐の5つの部門ともにそれらの部門間の相互の連絡はいかになるのであろうかと疑問をなげかけ、その理由として、「図書館学が現実科学としての社会科学として成立する限り、それは現実に対する関心から出発するものである。しかしそれが科学として成立するかぎり、問題はつねに真理性にある。(中略)科学はどこまでも真理の追究を目指すものだからである。」、「学的体系なくして、現実の図書館活動の事実に基づく実質的連関に着目したものに外ならなかった。」(p.4)と批判している。小野の「図書館学大系論は、これまでの日本の館界における体系論をもっともよく示すものと思われる。」としながらも、「学的対象として構築されていない、生のままの現実の図書館活動の事実には体系概念を基づかせようとするとき、体系に混乱をもたらし、単なる項目の羅列に終わるのである。(中略)項目間の方法的関連が見出されない。各項目を結びつける基底としては現実の図書館活動の事実はあるが、これは学理的原理ではない。(中略)体系は学問的原理としての方法概念につらぬかれていなければならない。」(p.3)と厳しく断定している。

小野と大佐との図書館学体系はいずれも、「学的体系ではなくして、現実の図書館活動の事実に基づく実質的連関に着目したものに外ならなかった。」(p.4)としている。このような体系が学理的体系として誤認されるところから、(中略)図書館学におけるいわゆる図書館理論と図書館実務との「両者の間の関係は如何」という疑問が提出されてくるのである(p.4)と図書館理論(図書館学)と図書館実務(技術)の混同を厳しく指摘している。

③神本光吉「図書館理論と図書館実務」<sup>26)</sup>に対する疑問。図書館学における、図書館理論と図書館実務との「両者の間の関係は如何」という疑問に対して、「図書館学にはその内容に図書館技術を持つものではない。もしあくまでもそれを内容とすることを主張した時には学問として成立し得ないであろう」と述べていることについて、岩猿は「学にとって大切なのは、現実の事

26) 神本光吉「図書館理論と図書館実務」図書館員のメモ 第2号 1955. P. 1

象をいかに学的対象として構成加工するかという方法の問題である。このように見てくるとき、神本氏のように図書館学理論と図書館実務を峻別する事自体意味を持たないことになる。」(p. 4)と神本の図書館学体系について批判している。「学にとって大切なのは、現実の事象をいかに学的対象として構成加工するかという方法の問題である。」「図書館現象が文化的社会現象である限り、図書館学は社会科学の一つとしてのみ成立するのである」(p. 6)と述べている。

④藤林忠「図書館学の基礎問題」<sup>27)</sup>の図書館学の体系について、藤林は図書館学の根本原理としての読者と図書との関係にもとづいて、現在の図書館発達の段階における構成要素である読者、館員、図書、図書館を体系づけて、一覧表にして図書館学の体系を展開している。岩猿は「学問構成の手続きが方法的であり、またその体系が原理的な方法概念（一つの原理から導き出されている）によってつらぬかれている。(p. 6)」と評価している。しかし藤林が図書館学の根本原理として、「読者なる者と図書なるものとの結合に基づく新たな思惟活動の創造という根本的な観点をとろうとしているが、(中略) 広く文化的社会現象といわれるものの中から、図書館現象という一つの現象を単純化し、限定していくには不十分と思われる。藤林の見解は優れたものとおもうのであるが、この点において私（岩猿）は十分に賛意を表すことができない。」と結論している。図書館学における方法として、「図書館学の原理とよばれるものも、文化的社会現象を、社会学や経済学や政治学や、その他の諸科学とは違った観点からとりあげなければならない。各々の学問を分けるのは、このような根本的な観点、すなわち原理によるのであって、認識対象によるのではない。」(P. 7)と文化的社会的現象の特徴について説明している。

四名の図書館学の体系について論じ、続いて岩猿の図書館学における体系の意義について述べている。「図書館現象のような文化的社会現象は永遠に向

27) 藤林忠「図書館学の基礎問題」『山口大学教育学部研究論叢』Vol. 1, No. 1, 1951, 156)

かって限りなく流転していく。このように流転していくものを科学的に把握しようとする社会科学にとって、体系というものはいかなる意味を持つであろうか」(p.7)と問題提起をし、「社会科学における体系は、社会科学が現在において取り扱うべき問題と領域とを示すだけの者に外ならない。実在はつねに体系的固定化を打ち破って流れて行く。このような実在を体系から演繹しようとすることは全く不可能である。」「このように流れ動いて実在を科学的にとらえようとする場合、いかなる方法(第1の方法概念)<sup>28)</sup>をとらなければならないであろうか。」と問いかけ、「図書館学が社会科学の一つとして成立するかぎり、図書館学にとって図書館史こそ、もっとも根底的なものとならなければならないであろう」(p.8)「社会科学としての図書館学にとっては、(中略)体系なるものは大した意義を持ち得ない」「図書館学が現実科学としての社会科学として成立する限り、それは現実に対する関心から出発するものである。しかしそれが科学として成立するかぎり、問題はつねに真理性にある。したがって、図書館学の成果が図書館実務の上に役立つかどうかということは問題でない。(中略)科学はどこまでも真理の追究を目指すものだからである。」と見解をまとめている<sup>29)</sup>。

岩猿のこの論考に対して森耕一は、次のように批判している<sup>30)</sup>。「岩猿自身の見解はこの論文の後半に、体系というものはいかなる意味を持つであろうか」<sup>31)</sup>という設問をし、それにたいして「社会科学としての図書館学にとっては、体系なるものは(中略)大した意義を持ちえない」<sup>32)</sup>と結論している。(中略)「岩猿氏はこの論文の全体を通じて、いったいなにを言おうと

28) ヘーゲル哲学による学における体系定義学門における方法 1)「学問研究の方法」(種々の図書館現象を統計的方法で取り扱う。)歴史的方法で対象にせまる。2)学問内容がいかなる観点からなされたかという「学問構成の原理」の二つの方法概念

29) 「図書館学における体系と方法」の投稿の翌年6月に「図書館学と実践」で「現場にたいする生産性あるいは実践性をもたない図書館学を独走させる」ことの意義について、「一文を草していたので」(p.33)と書いている。

30) 森耕一「図書館学は有効でなくてもよいか-岩猿氏の「体系と方法」について-」『図書館界』Vol. 9, No. 6 1958 p. 189)

31) 「体系というものはいかなる意味を持つであろうか」日本図書館学会年報Vol. 4, No. 2, 1957. 9 p. 7

32) 図書館学における体系と方法」p. 8

したのであろうか。残念ながら、私の力では十分に理解することができなかった。一つには、私自身の社会科学的素養の不足のためであろうが、あちこちで論理の飛躍を感じた。部分的には理解できても、次々のつながりがわからない。そして、最後に言おうとしていることも察せられないではないが、その結論が、私には、また賛意を表しがたいのである。」(p.189)と異議を述べている。最後に「図書館学の成果が図書館実務の上に役立つかどうかということは問題ではない。もちろんその成果は実務の上に生かされて、何らかの効果をあげうるであろうが、そのこと自体は図書館学にとっては問題ではないのである。科学はどこまでも真理の追求を目指すものだからである」(p.8)という結語に、わたしは賛意を表しがたい。こういう結論が、どういう思考過程をへて出て来たものか、残念ながら、この論文だけでは理解し兼ねるのであるが、その理論的過程はしばらくおくとして、ともかく、この結論は肯定しがたい(p.190)。さらに、森は「学として成立するためには、そのような姿しかあり得ないならば、なにも図書館学を成立させる必要はない。19世紀的な、盲目的な(責任をとらない)科学は、むしろ危険である。それくらいならば、技術論・政策論だけで、たくさんである」(p.190)と岩猿の図書館学の有効性について真向から否定している。岩猿が大学で教えられる学にふさわしい学問領域として認知を得るために図書館学を定義づけようと試みた意図は森には理解されていなかったようである。

#### 4. 「図書館学と実践」<sup>33)</sup>

森耕一の岩猿論考にたいする批判のうち最も重要な問題について岩猿の論考である。「図書館学における体系と方法」に対する森耕一の批判<sup>34)</sup>に対して、岩猿は、「ほくがいま森氏の批判に直接答え得ないのは、森氏自身の図書館学にたいする全般的な態度について十分な理解を持ち合わせていないか

33) 「図書館学と実践」『図書館界』Vol. 10, No. 2, 1958, 6, p. 33-37

34) 「図書館学は有効でなくてもよいか—岩猿氏の「体系と方法」について—」『図書館界』Vol. 9, No. 6, 1958, p. 189



らである。(p. 33)」と見解を述べるにとどめてはいるが、森の指摘に対して、岩猿は、「学にとっては、その認識成果が真理であるかどうかということが問題であって、現場にたいして有効性をもつか、持たないかということは問題ではないという意味のことを書いた。」と述べている。岩猿は、

「学にとっては真理か否かが問題だとするほくのように、「図書館学を独走させる」生き方とはまるで反対のいき方のようにみえるであろう」(中略)「学と、とりわけ社会科学と実践とは深くむすびついたものであるからである」(p. 33)「図書館学の成立は、アカデミーの世界からよりも、むしろ現場職員の実践を通じてこそ切実に要求されているのである。実践に背を向けた閑人に暇つぶしの仕事では決してありえない。極限すれば、現場職員にとっては図書館学の支えなくしては良心的に一步も動くことはできないであろう。」学の真理性と有効性について「学問は真理の追究を「怯えないように断乎決断」する所から生まれる。このような学であってこそ、究極的に人類に対して有効性をもちうるのである。」「科学が森耕一氏が言われるような「社会のための科学」「人間のための科学」でありうるのは、それが真理を探究するものであるからである。しかしはじめから科学が近視眼的に「社会のための科学」「人間のための科学」でのみあろうとし、現在のみにのみ有効であろうとつとめるならば、すぐに起こりうる疑問は、いかなる社会のための科学か、いかなる人間のための科学かということである。ブルジュアジーのための科学もあれば、プロレタリアートの科学もある。この場合われわれがいずれの科学をえらぶかは、科学的真理によって決定さるべきであって、目の有効性によって決定さるべきものではない。(p. 37)」

と、現場の図書館職員の実践のために図書館学の重要性を強調し、学の真理性と有効性について、激しく森に反論を述べている。

続けて、図書館論の要求(学と実践)原因について、「戦後の日本では

1951年頃から、いわゆる図書館学論なるものが館界の一部でとりあげ始められてきた。その原因についてはいろいろ考えられようが、学としての図書館論が要求されてきたということは、結局これまでの日本の館界の動き全体については、はたしてこれでいいかとあらためて問い直す必要がおこってきたことである」(p.34)と述べている。

「図書館員は日本の社会の近代化のために、図書館という活動の場を通して戦っていかなければならないが、たんなる図書館にたいする技術論は、この戦いに目的を与えることができない。なぜなら技術は一定の目的があつてこそ、はじめて存在しうるものにすぎない。(中略)ところで今日図書館はいったいいかにあるべきかという根本問題がなんら明確にされていない。」非近代的な性格を深く蔵している日本の社会の近代化のために戦わなければならない図書館員は、また一方館界のこうした議論の食い違いになやまなければならない。学と実践の関係について、「科学はわれわれの実践的立場をどのように明晰にしてくれるのであろうか。」「科学はわれわれの実践的行為に対して、先ず目的にたいする手段の適合性と随伴的結果の秤量を可能にし、ついで目的自体の意義を明らかにし、最後に理念の批判的評価を可能にする」、「科学は我々の実践的立場を明晰にすることができるのである」(p.35)

と結論している。

「図書館設立の目的の上にあぐらをかいてきた戦前の図書館では、図書館に関する技術だけで十分であったし、図書館活動の目的について争われることもなかった。したがって図書館の科学にたいする要求も起こりえなかった。しかし図書館が、蔵書と建物と図書館職員からなる、「存在としての図書館」としてでなく、重要な文化的機能を遂行すべき「機能としての図書館」として、一般に理解されてくるにしたがって、図書館機能の意義や、図書館活動の目的を追求せざるをえなくなり、図書館学を要求してくる。実践

を通じてこそ学が真に要求されてくる。」岩猿の図書館学に対する哲学と思いが切実にあらわれている。図書館職員（司書）の社会的責任に言及する芽生えがここでもうかがうことができる。

## 5. 「図書館学における技術性的問題」<sup>35)</sup>

藤川正信「図書館学における技術性的問題」<sup>36)</sup>について岩猿は、書評で次のように述べている。藤川論文は、技術という観点から図書館学を包蔵する諸問題に焦点を当てることを意図するもの→「学と実践」この両者の混同が図書館学の当面している危険な状況と指摘→学問が究極的に求めるものは知的真理→であり、「学問は実践的要求を満足させる必要はない。意欲的存在としての人間が、自己の行為を批判したり、正当化する際に学問の成果に頼ることはさしつかえないが、自己の実践的用要求を学問に求めることは正当でない。彼はむしろ信仰とか道徳律とか“ハウ・トゥもの”に、それを求めるべきであろう」(p. 4)と書いているのは傾聴すべきであろう」としながらも「学と実践」がいかなる関連を持つものであるかについて藤川は言及していない、と盲点を指摘している。藤川の「技術論の考察」については、「図書館を場とした人間の実践行為をとりあげた場合、図書館人としての各自の、広くは世界観或いは文化観、狭くは図書館観が明確にされないかぎり、図書館における技術は単なる習慣的手段になりおわる」と述べ→技術がたんなる習慣的手段になりおわることなく、目的遂行のための生産手段でありうるためには、目的設定がはっきりしていることが必要である。→「個々の技術を統合し支配する立場」が明確になる。→図書館の目的とは何であろうか。→図書館機能の本質規定から明確にされる。「技術論は必然的に目的論（本質論）につきあたる。または、目的論（本質論）を前提とする」としている。岩猿は、藤川の理論の筋道を、「図書館活動の諸分野において、わ

35) 「藤川正信：図書館学における技術性的問題」『図書館学会年報』Vol. 5, No. 1, 1958. 7, p. 1-9

36) 「藤川正信：図書館学における技術性的問題」『図書館学会年報』Vol. 5, No. 1 所載（書評）『図書館界』Vol. 10, No. 4, 1958. 10, p. 124-126)

れわれはすでに多くの技術を駆使してきたが、図書館理念が明確にされないかぎり、図書館における技術は単なる習慣的手段になりおわる。すなわち技術としての意味を失う。」図書館理念が明確になれば、これまで利用されてきた「個々の技術を統合し支配する立場」が設定されることになるし、また新しい技術も発展しよう。「それは教育学において教育理念のないところに教育技術の発展を望みえない」のと同じであるとしている。

「技術と技術性」については、岩猿も出席した研究グループ例会第11回昭和33(1958)年11月15日では、藤川正信：図書館学における技術性の問題を取りあげ、岩猿の批判を参考に次のように報告されている。「技術とは、人間が「より効果的に物事を処理する手段」であり、技術性とは、いくつかの「技術を秩序づけ、組織化し、活かしてゆく知性」である。図書館の目的を、「記録された資料群を通じてのコミュニケーションの円滑化、能率化」とすれば、このためのすべての技術は技術性をもち、それを図書館学とよびたい。」以上の論旨に対し、技術と対比された“技術性”の概念の不明確さ、およびそれらと“学問”との差異の不徹底が特に問題とされ、また図書館に関する諸技術の体系的な把握を今後に残している点が指摘された<sup>37)</sup>。

「はく(岩猿)はとかく人から図書館本質論にばかり重点をおいて、図書館学における技術論の問題を全く軽視していると見られがちである。これははくがこれまで書いてきたものに、技術論関係のものがひとつもないので、そういわれてもしかたがないが、なにも僕は技術論を軽視しているのではない。それどころか非常に重視しているつもりであるし、本質論も、技術論、史論とからみ合わせないで形而上的にあるいは形式的にデッチあげても殆ど意味がないと思っている。図書館学における技術論の位置をどう考えるかについては、はくなりにより少しずつ考えてみる」(p.125)

37) 研究グループ例会報告 京都地区第11回 図書館学会年報5巻1号  
京都地区 第11回 昭和33(1958)年11月15日 午後1時半～5時 西京大学 テーマ「藤川正信：図書館学における技術性の問題」

として、さらに論究を進めたい意向を示している。「学と実践との関係は、図書館本質論と技術論との関係に相似している。(といっても、すぐに図書館本質論だけが図書館学と言うのでは決してない) (p. 126)」このように岩猿は図書館本質論と技術論について藤川の論文について論じている。

## 6. 「図書館学における比較法」<sup>38)</sup>

図書館学の研究方法としての「図書館学方法論試論」で述べた図書館学方法論について、方法論の追究の一方法として比較法について述べた論文である。「図書館学における体系と方法」において社会科学における歴史的方法について定義をした。「図書館学が社会科学のひとつとして、社会現象のひとつである図書館現象をとりあつかうものであるとき、図書館学にとっても、まず歴史的認識方法が要請されてくることは当然であろう」<sup>39)</sup>を引き継いで、論を展開している。まず、社会科学における歴史的方法について述べている。

「社会科学において、歴史的認識方法がまず要請されてくるといっても、それは単なる歴史的事実の発見ということだけに留まるのではない。発見された歴史的事実が、今日の社会現象にいかに関わりついて来るかという変化の過程の条件がつねに考えられなければならない。」(p. 1)

「科学としての図書館学をうち立てるためには学的作業の手段としての法則の発見につとめなければならない。(中略) 図書館学は一定の時間・空間の範囲内における図書館史的事実の叙述のみでは満足し得ない。法則は普遍妥当的なものでなければならない。→したがって一定の時間・空間の範囲内における図書館史的事実から、その範囲内において妥当する法則が発見されたとしても、その法則が法則として純化されるためには、他の

38) 「図書館学における比較法について」『図書館の学と歴史』(京都図書館協会十周年記念論集) 1958. 7, p. 1-6.

39) 「図書館学における体系と方法」『日本図書館学会会報』Vol. 4, No. 2, 1957. 9, p. 1-8.

それと比較しうる範囲内の事象にも同様に適合するかどうかを検証されなければならない。→他との比較を通じて、一般的法則もだんだんと発見されてゆき、またひとつの歴史的事象の特異性もうきばりされてくるであろう。ここに社会科学の研究方法としての比較法の重要性がある。」(p.2) 続けて、社会科学における比較法概念、そして社会科学における比較法について「比較法とはいかなる学的方法であろうか」→比較される資料が「比較しうるものであること→比較しようとする現象のそれぞれの発展の原因を探りいずれも統一原因の結果であることが歴史的に承認されてはじめて比較法が適用されるのである。」(p.3) と論を進めている。

このような歴史的方法による成果の上に根ざしてはじめて比較法はのみり多きものとなりうるし、比較法によって一般的法則が発見されるであろう。しかしながら、社会科学が認識しようとするのは、はじめにのべたように、事象の現実的な個性的な様相である。したがって歴史的方法によってえられた事実を相互に比較することによって、一般的な法則にたっしたとしても、それは究極の目的ではなくて、個性的な事象を説明するための作業場の道具にはかならない。それは科学者の観察のもとに入ってくる具体的な現実のあらたな断片を分析し理解するための道具であり、またまだ知られていない組織体の種類を発見するための道具である。(p.3)

比較法の図書館学における有効性の例として、分類の問題をとりあげている。しかしながら、分類法の比較研究にあたって、「いくつかの分類法における主題の排列について、たんに平面的な比較検討をおこない、その排列についていくら意見を提出しても、それはたいして学問的意義をもちえないであろう。」なぜなら、「部門の排列については分類表の創定者にそれぞれの意見があり、理由があって、けっして絶対的なものではあり得ない」からである。(p.4) 「歴史的研究の上に立った比較法は、図書館学においても(中略)図書館現象のあらゆる分野に適用されて、それぞれ豊かな学的成果をあ

げうるものであろう。その意味において、図書館現象の科学的考察をこころざす者にとって、比較法による研究は十分かえりみられなければならない。」(p.5) 岩猿の主張である。社会科学における歴史的方法と社会科学における比較法の相違の重要性について順を追って説明をしている。

「図書館学が社会科学のひとつとして、社会現象の一つである図書館現象をとりあつかうものであるとき、図書館学にとっても、まず歴史的認識方法が要請されてくることは当然であろう」「科学としての図書館学をうち立てるためには学的作業の手段としての法則の発見につとめなければならない」→「図書館学は一定の時間・空間の範囲内における図書館史的事実の叙述のみでは満足し得ない。法則は普遍妥当的なものでなければならない」→「したがって一定の時間・空間の範囲内における図書館史的事実から、その範囲内において妥当する法則が発見されたとしても、その法則が法則として純化されるためには、他のそれと比較しうる範囲内の事象にも同様に適合するかどうかを検証されなければならない。もしその場合、他の事象に適合しえないものであれば、その法則は法則として十分なものではありえない」→「このように他との比較を通して、一般法則もだんだんと発見されていくし、又ひとつの歴史的事象の特異性もうきほりされてくるであろう」→「ここに社会科学の研究方法としての比較法の重要性がある」

「分類の問題に関しては、(中略)ゆたかな成果をあげてきた。それは比較法の図書館学における有効性を示すものと言えるであろう」「分類法の比較研究にあたって、たとえばいくつかの分類表における主題の排列について、たんに平面的な比較検討をおこない、その排列についていくら意見を提出しても、それはたいして学問的意義をもちえないであろう」「分類表創定者の意見が「絶対的のものであり得ない」かぎり、創定者の意見にたいしては、別個の意見を容易に立てうるであろう。しかしながらの意見はそのまま学問ではない。知とか意見は証明されたとき、はじめて学問性をもちうるのである。だからいろいろの分類表の部門の排列について、

たんなる意見をいくら展開しても、それは学問とはならないのである」  
「分類表の部門排列の比較研究にあたっては、まず各分類表を当時の学問の発達状況と結びつけて考える歴史的研究によって先行されなければ、いたずらに議論を空転させるだけであって、真にみのり豊かな成果をあげることはできないであろう」「比較法は歴史的方法と相伴って、はじめて十分な効果をあげることができるのである」「歴史的研究の上に立った比較法は、図書館学においても、(中略)図書館現象のあらゆる分野に適用されて、それぞれ豊かな学成果をあげうるであろう。その意味において、図書館現象の科学的考察をこころざす者にとって、比較法による研究は十分かえりみられなければならない」歴史的研究に基づいた比較法は図書館現象の科学的考察をこころざすものにとっての重要性をのべている。「比較図書館学では、図書館の文化的・社会的基盤にまで、掘り下げていかなければならない。そのために、困難な方法であるが、図書館学をみのり豊かにするものであることは間違いない」

と「図館史〈特集：戦後日本における図書館学の発展<sup>40)</sup>〉でも述べている。

次に比較法にたいする反省を述べている。比較法は「ひとつの学的方法という名にふさわしいものであるかどうか」→「比較法は、厳密な一定の学的方法というよりはもっと漠とした観点とでも言うべきかも知れない。(中略)比較法がひとつの学的方法として厳密なものでなくても、自覚的な観点としてとりあげられるとき、それはわれわれの図書館学においても、興味ある新たな研究領域を開いてくれるであろう。」と結んでいる。

1972年の論文、「比較図書館学について(提言)」<sup>41)</sup>では、「比較するという

40) 「図館史〈特集：戦後日本における図書館学の発展〉」『書館界』Vol. 11, No. 2, 195

41) 「比較図書館学について(提言)」『図書館界』Vol. 24, No. 2, 1972. 6, p. 43.

「図書館学方法論試論」では、図書館学の社会的科学の枠組みを示した。続く5論文を通じて、図書館学の「学」の研究法方法についてひとつの方向を示した。図書館学の対象が「もの」から「人」に劇的に変化した時期にあって、社会科学的手法で図書館学を考察しようとした試みと、図書館学の成立は、アカデミーの世界からよりも、むしろ現場職員の実践を通じてこそ切実に要求されているとい



ことを、図書館学の方法としてとりあげることが少なかったのは、われわれが勉強してきたアメリカの図書館学に、このような観点が、わりに稀薄であったことによるものと思う。」その根拠として、「19世紀の最後の25年以來、アメリカ図書館学が開発したカード目録法、主題分類法、及び件名索引法と云う情報処理技術が、すばらしいものであり、技術して普遍的に適用されうるものであったため、アメリカの図書館人には、アメリカ図書館学が世界のどこにも通用しうるものという、楽天的な普遍主義が沁みついてしまったようである。」「このような普遍主義のもとでは、比較的な観点が深められることは困難であった。」としている。「技術は、その技術を必要として生み育ててきた文化的・社会的基盤をもつ。したがって、ある技術の意味を理解するためには、文化的・社会的なコンテクストの中において理解しなければならない。文化的・社会的基盤を全く異にする図書館に、他の国で開発された図書館技術が、そのまま必ずしも有効に適用されうるものではない」と補足をしている。

## Ⅱ. 図書館学論が惹起された原因（1） 図書館法の影響

図書館法の制定、図書館法の内容を周知するための、教育指導者講習、その人たちによる司書講習を通じてアメリカの図書館学が広まった。180度転換させられた新しい図書館観。図書館界の人たちの疑問。図書館の本質、書館の基本を問い直す動き。この問いかけが図書館を科学的に見ようという図書館学思考を生み出した<sup>42)</sup>。

第一世代の図書館学者（図書館法公布以前）。戦前から戦後にかけて日本の図書館学をリードしてきた人たち。代表として岩猿は、小野則秋、竹林熊彦をあげ、書誌学を中心とした人文科学に基づいた図書館学の研究者。書館に対する学問の中心は図書学あるいは書誌学、人文科学的な図書館学研究

う視点は注目すべきである。

42) 「戦後の図書館学についての回想—竹林、小野先生の業績にふれながら—」『同志社大学図書館学年報』No. 17, 1990. 6, p. 33-45.

者。第二世代の図書館学者（図書館法公布以降）。戦後、新たにおこってきた社会科学に基づいて図書館学を考察する人たち。代表として、小倉親雄をあげ、岩猿自身も、この第二世代である。図書館学の主たる対象が社会（利用者）に移る。社会科学的な考察が要求される。図書館法を契機にして、日本の図書館学が人文科学的図書館学から社会科学的図書館に基づく図書館学へと大きく変わった。

岩猿は社会科学としての図書館学を、マックス・ウェーバーの社会科学方法論をよりどころに図書館学論を考えた。岩猿は、民主主義社会における図書館の役割を考えた時、「学」が必要としたのである。森耕一との論争で、戦前の、岩猿が定義する第一世代の図書館人と戦後の第二世代の図書館人の葛藤を見事に表している。技術を中心とした当時の森の考えがはっきりとあらわれている。

岩猿の「図書館学における体系と方法」に対して、森耕一の岩猿の図書館学に対する辛辣な反論がある。岩猿が定義した第一世代と第二世代の論争と理解できる。森は言う、「図書館学を成立させる必要はない。技術論、政策論だけでたくさんである」と、岩猿の「学」樹立の必要性を否定している。この森の批判に応じるように「図書館学と実践」を書いている。戦後の民主主義社会の図書館、社会の変化に対応して、図書館人が社会的な存在としての図書館学を求めている岩猿は、図書館業務を担当する図書館員の立場を念頭に置いている。1955年に『図書館雑誌』が「書誌学を復興すべきか」というアンケートを実施したが、それ以降『図書館雑誌』の上で書誌学の書の名も出なくなった。1955年頃まではまだ戦前の人文科学的図書館学が少しは残っていたが、この頃を境にして社会科学的図書館学に移ってしまった。『図書館ハンドブック』第1版には書誌学の項目はあるが、第2版以降、書誌学の用語は消えてしまっている。第5版は森耕一が編集委員長であったが、やはり書誌学の項はない。

二人は4歳違いだが、ほとんど同時期に、ともに京都帝国大学で学んだ。岩猿は文学部（人文科学）、森は理学部（自然科学）である。学問の根底に

ある思考方法・論理構成の差による影響によるもののほかに、岩猿が、実務経験を持たずに図書館界に身を置き、最初に図書館法に盛り込まれたアメリカ図書館学に基づく教育指導者講習を受講し習得し、教員の望みを持ちながらも、思いもよらなかった京都大学附属図書館の重責に就いた岩猿に対して、最初から現場の分類作業という、従来からの図書館学に基づく技術をもとに、現場の実務（技術）から図書館界に入り、自ら図書館界に転身した森。岩猿は森が経験していない軍隊経験者であり、この差が二人の思考・行動に非常に大きく影響していると考える。

図表 2 岩猿敏生・森耕一 略歴

岩猿敏生	森耕一
1919. 4 出生(福岡県)	1923. 8 出生(鹿児島県)
1943. 9 京都帝国大学文学部卒業 兵役(渡満州)	1945. 9 京都帝国大学理学部卒業
1945. 8 終戦(除隊)	1947. 6 鹿児島県立第二女学校嘱託
1946. 4 九州帝国大学法学部大学院入学	1948. 5 鹿児島県立鹿児島医科大学予科 講師。図書課長兼務
1948. 3 九州帝国大学大学院中退	1951. 5 和歌山県立理科大学短期大学講師
1948. 4 福岡県立高等学校講師	1955. 4 和歌山県立医科大学講師
1950. 8 九州大学附属図書館司書官	1961. 9 大阪市立中之島図書館整理課長
1956. 4 京都大学附属図書館事務長	1964. 7 大阪市立天王寺図書館長
1961. 4 同整理課長	1971. 6 大阪市立中央図書館長
1965. 4 同事務部長	1977. 1 京都大学教育学部助教授
1976. 4 関西大学文学部教授	1978. 4 京都大学教育学部教授
1990. 3 退職	1987. 4 光華女子大学文学部教授
2016. 4 死去(96 歳)	1992. 3 退職
	1992. 11 死去(69 歳)

森耕一の整理技術（狭義の分類法）研究は、1948 年 5 月鹿児島県立鹿児島医科大学で図書課長兼務をしたことに始まる。医学図書館で適用する分類表の策定からはじめ図書館業務を経験後 5 カ月に満たない段階で、EC（Expansive Classification）を土台に、独自の分類表を考案している。1951 年 5 月和歌山県立理科大学短期大学講師の職を得た森は、日本図書館研究会（日図研）に参画し、1951 年 8 月、分類に関する最初の論文「図書分類法における物理学の分類（1）」を『図書館界』3（2）：1951.8；50-52, 56」に載

せた。翌年の1952年2月には「図書分類法における物理学の分類(2)」を『図書館界』3(3):11952.2:83-85に続編として投稿している。このように、森の図書館学におけるもっともはやい時期の業績は、分類法であった。

### Ⅲ. 図書館学論が惹起された原因(2) 社会情勢の変化・反動

戦後のわが国図書館人のアメリカ図書館学との出会いは、まさに大きな文化的衝撃であった。看板こそ天皇制に基づく国家主義からアメリカ流民主主義へと塗りかえたが、民主主義に基づくライブラリアンシップは、まだ十分に根づくまでには至っていなかった。そのため、戦後のわが国の民主化のながれにかけりが生じてくると、(1950年朝鮮戦争(～53)、警察予備隊新設、レッドパージ、1951年サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約調印など)ようやく育ち始めた図書館の基盤が揺らいでくる。戦後の日本の館界がモデルとした、アメリカ図書館運動の基盤であるアメリカ図書館学は、慶応における日本図書館学校のスタートをはじめ、各種講習会におけるアメリカの図書館人による直接の指導等を通じて、日本の館界の広い層が、じかにアメリカ図書館学の洗礼をうけた。昭和20年代後半における図書館の中立性や自由に関する論争は、われわれに図書館の本質に対する思考を必然的に要求してくる。戦前の天皇制デスポチズムの下においては、ハウ・ツー中心のライブラリ・エコノミーに止らざるをえなかったわが国の図書館研究も、今や図書館の本質を学問的に問うことがようやく可能になり、また、問わざるをえなくなった<sup>43)</sup>。図書館論の要求の原因として「戦後の日本では1951年頃から、いわゆる図書館学論なるものが館界の一部でとりあげ始められてきた。その原因についてはいろいろ考えられようが、学としての図書館論が要求されてきたということは、結局これまでの日本の館界の動き全体については、はたしてこれでいいかとあらためて問い直す必要がおこってきたことである」<sup>44)</sup>

43)「裏田会長のご逝去を悼む」『図書館学会年報』Vol. 33, No. 1, 1987. 3, p. 23

44) 裏田武夫 図書館学研究の視点『武田虎之助先生記念論文集』1970 p. 245

#### IV. 図書館学論の終焉

##### 1950年代における図書館学論

「50年代を通じて一種の熱気を帯びて論じられた図書館学論も、60年代以降潮が引くように論じられなくなる。50年代の図書館学論については「わが国における図書館学に関する学問論ないしは科学成立の根拠に関する研究は、現在に至るまで総じて不毛である」といってよいであろう」<sup>45)</sup>という評価もある。しかし、不毛であったのは、当時書かれた図書館学論が、明確な図書館学方法論を具体的に示すまでにいたらなかったということであって、図書館学論が論じられたこと自体が無意味であったわけでは決していない。それぞれの学問分野における学問論は、一つの知的認識が学問的認識として成立しうるかどうかという問いである。既成の学問も時にその成立基盤に立ち返って、その学問の本質すなわち学問論を問い直すのである。学問論とはその学問のスタートのときのみにとわれるものではなく、その学問が一つの曲り角にさしかかるとき、常に改めて問い直されるのである。図書館学を一つの学問領域としてスタートさせようとするとき、それがどのような学問的認識として成立しうるかという学問論が問われたのは当然であった。しかし、50年代の図書館学論では、図書館学を社会科学の一分野として位置づけ、社会科学の学問方法論によって、学問的認識として成立しうる可能性が追及されただけで、図書館学独自の方法論の確立までにはいたらなかった。そこに、不毛ではなかったかという批判もおこりえたのである」<sup>46)</sup>

と岩猿は締めくくっている。

#### V. 岩猿敏生の図書館学論

岩猿の図書館学の思考錯誤は「図書館学方法論試論」を公にすることから

45) 裏田武夫 図書館学研究の視点『武田虎之助先生記念論文集』1970 p. 245

46) 高山正也、岩猿敏生、石塚栄二『図書館概論』（講座 図書館の理論と実際 1）雄山閣、1992. 4, p. 193

始まった。図書館学という学問の構成原理の基礎についての一般考察という、「学問構成の原理」について述べ、補完する形で「図書館学論の進展」「図書館学と実践」「図書館学における比較法」と論をすすめ、比較法には歴史的方法、図書館学における、図書館史の重要性について言及している。しかし、岩猿の「図書館学方法論試論」を直接とり上げ論じた論文はみあたらない。図書館学という文化的事象を学問対象として研究する場合の社会科学的思考の枠組みを考えた内容であったことによるものなのか。この時期、図書館現象を学問の対象として、扱う状況でなかったのか、早すぎた論文であったのであろうか。

戦後の図書館史研究は、第一に図書館史的事実の発掘から一歩進んで、「図書館はいかにあるべきか」という現実的な関心から図書館史研究がすすめられてきた。本格的な図書館史研究があらわれはじめた昭和27年ころから、図書館学論が大きく問題になり始めてきていることの重要性を指摘し、「図書館はいかにあるべきか」という、図書館史の場合と同じ現実的な関心から推し進められたもので、同じ関心が一方では歴史的構成へと向かわせ、又一方では図書館学の理論的構成へと向かわせた。それは結局従来の図書館像の上に安住することを許さなくなった現実の図書館界の進展と、それにとまなう図書館像の混乱と矛盾。そうした現実からの強い要請を、自覚的に研究者たちが問題としてとりあげはじめた。大げさに言えば、日本においては昭和27年頃からはじめて図書館現象が学問の対象として、本格的にとりあげはじめた。戦後の図書館史研究を特徴づけるのは、このような一般的な図書館学の流れのなかで、本格的な科学として研究が進めはじめたということである<sup>47)</sup>。

とまとめている。

47) 「図書館学方法論試論」『図書館学』No. 2, 1955. 6, p. 1-10.

## VI. むすび

「図書館学方法試論」に対する、論文・記事は見当たらない。発表された当時、館界では、模範とできる資料は教育指導者講習テキストだけであった。1950年に公布された図書館法の持つ、新しい理念に立つ図書館学の浸透がまだ図書館界に十分に浸透していなかった早い時期であったこと、何よりも抽象論であったために、いまだ技術中心の図書館界であったことに起因すると考える。しかし、1950年代の図書館学論争の嚆矢となる画期的な論文であった。

岩猿は「図書館学方法論試論」で展開した論法で、図書館は社会現象である。→社会現象に対する学問的アプローチは、社会科学としてのアプローチである。社会科学の一つとして図書館学の確立方法そのための方法論はどうあるべきか、さらに、図書館学の発展のためには経験的知識の集積と合理化だけでなく、学問的な方法に基づいた社会科学研究がどうしても必要であることを明確にすることができた。と評価される。

「人・本・図書館」には次のような、記述がある<sup>48)</sup>。図書館界のリーダーとしての自負が強く感じられる示唆に富んだ一文である。「以前「図書館界」「図書館雑誌」等で二、三意見を出しましたが、図書館学論について、私は不用だと思っています。不用なものについて何故論議したかと言いますと、図書館人自身が図書館学というものはないだろうとか、図書館学と言うものはなり立たないだろうとか言う者が意外に多かったので、成り立つか、成り立たないかという問題ではなく、「テーマ」は何であろうとも、それを学問的方法でやりさえすれば、それは立派な学問的活動になるものです。図書館人が図書館学について、変な「コンプレックス」を持たずに、自分の仕事として、堂々と進んで欲しかったからです」と締めくくっている。

48) 京都図書館協会会報 (No. 68. 1963. 7)

## 参考文献

## 1. 『岩猿敏生新聞発表集』

## 切り抜きのタイトル

最近の洋書文庫目録(書評) 昭和26年4月20日 毎日新聞

新着日本関係洋書(1)(書評) 昭和26年5月5日 九大新聞

肉体の政治学へ 心と肉体 ダンバー著(書評) 昭和26年6月20日 九大新聞

書物の革命 昭和26年9月27日 毎日新聞

青柳種信のこと 昭和27年5月15日 毎日新聞

原稿料 昭和27年2月14日 毎日新聞

食と性から覗く興味(書評) 昭和27年6月13日 西日本新聞

今週の新刊から(書評) 昭和27年7月9日 毎日新聞

すぐれた案内書 世界映画史(書評) 昭和27年12月23日 西日本新聞

今週の新刊から(書評) 昭和28年8月14日 毎日新聞

読書習慣に寄せて 賣らんかなの出版会 昭和28年11月1日 内日新聞

本のはなし①書物について ②著者について ③かたちについて ④本の美について ⑤装丁について ⑥誤植について ⑦印刷について ⑧本の敵について ⑨書狂について

言語のむなしさについて BUNKA FUKUOKA 1954. 11. 25

秋に愛唱する 昭和30年10月19日 毎日新聞

ツ－マイ・ワイフ 昭和30年10月30日 毎日新聞

菊とトマト(随想) 昭和31年9月29日 京都新聞

文庫めぐりを終えて 百八回の舞台裏 昭和36年5月 日本経済新聞

## 2. 岩猿敏生「九州と三人の図書館史家―竹林熊彦、小野則秋、永末十四雄―」『図書館学』No. 93, 2008, p. 1-12.

## 3. 図書館雑誌 1954. 12号ニュース 有山崧 講演：図書館学成立の一つの可能性

## 4. 森耕一追悼事業会『目録図分類の理論』1993. 11, p. 252

## 5. 森耕一略歴「図書館研究第9号」1993年6月 (日本文化史研究)

## 6. 「図書館文化史と図書文化史」『日本図書館文化史研究会創立25周年記念2007年度研究集会・総会予稿集』2007, p. 17-27.

## 7. 遺稿：岩猿は論考のために、古紙の裏面を再利用したB5版大の1,000枚以上に及ぶ、備忘録、書物の抜書き、論考の一部分等を書き残している。京都図書館学研究会では2015年の初めに岩猿先生の論文を1冊にまとめて刊行することが決まった。先生はその刊行物に新しい論文も入れたかったようである。永眠1カ月



まえに京都図書館学研究会の会員への手紙に、「書くつもりでいた2、3のテーマについてそれらは手元の資料の範囲内のことですが、なんとか一応まとめたい」と死の直前まで論文の執筆の様子をうかがうことのできる資料であり、最後まで現役の研究者であった岩猿敏生研究に欠くことのできない資料である。

## 8. 追悼文

- 追悼・岩猿敏生さん 図書館界 Vol. 68, No. 3, 2016, p. 215
- 京大図書館事務長時代の岩猿敏生先生 廣庭基介 図書館界 Vol. 68, No. 3, 2016, p. 216
- 岩猿敏生先生を偲ぶ 大城善盛 〃 p. 217
- 〈訃報〉岩猿敏生氏 図書館雑誌 Vol. 110, No. 5, 2016, p. 208
- 岩猿敏生先生を送る 河井弘志 図書館雑誌 Vol. 110, No. 9 p. 585
- 岩猿敏生先生を偲ぶ 漢那憲治(西日本図書館学会) 図書館学 No. 109 p. 2-3 2016. 9
- 岩猿敏生先生を偲んで 中島幸子 同志社大学図書館年報 第42号 2017 p. 115-121
- 名誉会員・岩猿敏生氏のご逝去を悼む 小田光宏 日本図書館情報学会会報 No. 162, 2016. 6, p. 1

## 補足

### 岩猿学説を研究テーマに選んだ理由

岩猿は、図書館法定後の図書館近代化(図書館経営)に行政官、教育者、研究者として功績を遺した。図書館学の学定義を最初に試みた人物でもあるため、戦後の日本図書館界の論考に欠くことができない。1943年京都帝国大学を卒業後、1950年「図書館法」公布の年に九州大学附属図書館司書官に任官。1956年に京都大学に転任。以後20年間、附属図書館(国立大学図書館協議会副理事館)の事務長・事務部長(国立大学図書館の行政官として20年間の長期にわたりその要職にあった人物はほかには見当たらない)にあって戦後の図書館行政を牽引した。その後14年間、関西大学文学部教授の任にあって、図書館学、図書館司書課程において教育者・研究者として、大学図書館の中枢近くで活躍した。さらに、同大学退職後も死の直前まで、約65年の長期にわたり、行政官、教育者、研究者として図書館界を牽引した。この間、国立大学図書館協議会、日本図書館協会(理事、参与、顧問)、日本図書館情報学会(会長、顧問)、日本図書館研究会(会長、理事、評議員)等の要職を歴任した。このような経歴・業績を持つ岩

猿敏生の人物研究することにより、戦後の民主主義社会における図書館運営（図書館経営）の展開を究明することが可能となる。

（やまなか・やすゆき／経営学研究科博士後期課程／2017年7月31日受理）

## Toshio Iwasaru's Days as the Kyushu University's Librarian ; His Academic Passway from the Origin to Being a University Library Management Professional

YAMANAKA Yasuyuki

The purpose of this paper is to focus on the time of the Kyushu University Library that first worked as a liaison officer and to study his footsteps. I will examine the academic image of university library management and library science based on the first paper "Theory of Library Studies Methodology". Through literature research on related works, as the chief executive officer of the administrative officer who got to the librarian after graduation from the imperial university, an attempt to establish "library science as academic" of the fundamental principle of library management (administration). How did you develop and change it as a senior staff on the National University Library timely according to the accumulation of practical work and research? I will clarify the beginning by considering it according to the social context at the time. I'd like to lead the Japanese Library world after war I will clarify the first step approaching the overall university library management and library (Information) studies.